

7 組同級会・錦秋の宴

10月17日(土)の夕刻、7組の同級会が別所温泉の「松籟亭」で開催された。30年以上前に開催されたことがあったらしいが、それすら覚えていないほど久しぶりの同級会である。幹事は地元で長年にわたり公務を担ってきた小山田秀士(以下、すべて敬称略)。

出席者は、地元が13名、関東から6名で合わせて19名。私(櫻田)にとって49年ぶりは、加々井孝一、近藤(桜井)正子、清水邦彦、滝沢博俊、林茂、山口武の6名。小山田のおおらかな人柄が生存クラスメートの半数を集めた。

さて、同級会は、写真撮影を済ませると小山田幹事の開会の辞で始まった。幹事のあいさつはあくまでも謙虚で出席者をリラックスさせた。ついで物故者に対し黙とう。還暦記念同期会(2008・9・20)のときには一人も欠けていなかったのに、この7年間で笹川光、甲田和弘、矢島好高、柳沢建夫と担任の塩野入先生が鬼籍に入られた。そして、東京から参加の西澤省悟が乾杯の音頭を取り、松茸づくしの宴会が始まった。ちなみに「松籟亭」の社長兼板長は、甲田和弘の遺児(二男)であり、親父によく似た彫の深い顔であいさつに来てくれた。

50年前の7組は、同級会が絶えて久しいことからわかるように、仲良くまとまっていたわけではなかった。子どもたちは、担任教師の話を聞き入れるでもなく、無視するでもなく、それぞれが自分のポリシーと都合よく折り合いをつけ、独自性を保っていた。わかりやすく言えば、自分勝手だったわけだ。だから、卒業時にも、舟木一夫が歌う「クラス仲間はいつまでも♪」などという感慨はなかった。

ところが、50年後、松茸の土瓶蒸しを飲み終えるころから、宴は7組らしからぬ盛り上がりを見せ始めた。いくつもできた車座で、波乱に満ちた人生が語られ、現況に対する不満や不安が吐き出され、共感が生まれ、励まし合いが行われている。あるいは、気安く罵倒しながら互いに称えあっている。出席者の紅一点は長く教職にあった近藤(桜井)正子であるが、教室で声を発することすら稀であった少女が、いまやお銚子をもって車座を巡回し、懇親の輪の中で興じている。キャノンOB中村宣夫の赤ワインのピッチが上がると、隣にいた清水邦彦がいち早く出来上がり、宴は最高潮に達した。重苦しかった高校時代も、挫折続きの過去も、ようやく手にした栄光も、いまだに苦しい現況も、すべてが超越され、クラス仲間が融合した瞬間が訪れた。

そうなるとう然ることながら名残惜しい。しかし、池田恵一の終電の時刻が迫る。立ち去り難い思いが募る中、ドクター沢井繁男が一本締めをして、再会を誓い、錦秋の宴はお開きとなった。

(2015・10・20 関東同期会 7組幹事 櫻田喜貢穂 記)

【次ページ写真説明】(1) 前列左から 小山田、西澤、沢井、近藤/旧姓桜井、山口、吉池
中列左から 櫻田、安川、清水、小川、滝沢
後列左から 中村、小嶋、池田、宮沢、加々井、宮崎、林、小林

(2) クラス会宴会風景



写真 1



写真 2